SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

機能推移

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00001108

機 能 推 移

大 村 光 弘

1 はじめに

本稿で扱う言語現象は、形式上まったく等しい母型節が意味上異なった機能を果たす現象である。たとえば、(1)−(3)に於ける下線部の表現に着目すると、それぞれが他とは異なった意味機能を担っていることが理解できる。[1]

(1) Christie, ***The Mysterious Affair at Styles,*** Ⅲ, 29
The convulsions were of a peculiar violence, Dr. Wilkins. I am sorry you were not here in time to witness them. They were quite … tetanic in character.
(あの痙攣には特異な激しさがありましたよ、ウィルキンズ先生。お見えになるのが遅れて、あれをご覧にならなかったことを残念に思います。あれは、まさしく……強直性のものでした。)

(2) Montgomery, ***Anne of Green Gables,*** XIX, 191
(". . . Sit down here and tell me about yourself.")
"I am very sorry I can't," said Anne firmly.
(「とても残念ですが、そうしていられないんです。」と、アンはきっぱり言った。)

(3) Christie, ***Murder on the Orient Express,*** Ⅲ, Ⅵ, 221
I am sorry, M. Poirot, but I must refuse to answer that question.
(申し訳ないが、ポワロさん、その質問に答えるわけには参りません。)

(1)では、I am sorry が過去に生じた事態に対する話者の命題態度を表しているのに対して、(2)では、話者の命題態度というよりは寧ろ、中心的断定部の語気を弱める働きをしている。最後に(3)の事例であるが、ここでの I am sorry は、接続詞 but に続く内容に対する前置きとなっている。もう少し詳しく言えば、but 以下の中心的断定部に対する話者の発話態度を表している。このように形式

上同一の母型節が異なった意味機能を果たす現象は、sorry 以外の様々な述語に関しても観察される。以下の議論では、当該現象をただ単に同一表現の異なった用法として処理するのではなく、自然言語の変化にみいだせる一般的特性の反映として捉えるとともに、言語の普遍性を扱う意味理論に基づいた説明を与える。

2　理論的枠組

2.1　機能文法の基本概念

具体的な言語現象の分析に入る前に、本稿が依拠する文法理論、すなわち機能文法（Functional Grammar）について概観しておく。近年の機能文法の文献の中でとりわけ説得力をもって論証されているのは、発話を構成する意味的・機能的構造が、順序づけられた階層構造を成すということである（Dik 1997, Hengeveld 1989; 1990; 1996, etc.)。(4)と(5)は、Hengeveld (1996: 120) が提案する発話階層構造である。

(4)　発話階層構造（Layered Structure of the Clause）[2]

$(E_1 : [\,(F_1 : ILL\ (F_1))\ (S)\ (A)\ (X_1 : [\qquad\qquad]\ (X_1))\,]\ (E_1))$

$(e_1 : [\,(f_1 : Pred_\beta\ (f_1))\ (x_1 :)\,]\ (e_1))$

(E_1)	節 (Clause)	(e_1)	叙述 (Predication)
(F_1)	発話内述語 (Illocutionary Predicate)	(f_1)	述語 (Predicate)
(X_1)	命題 (Proposition)	(x_1)	項 (Term)

(5)　各層の指示対象

層	指示対象
(E_1)	発話行為 (Speech Act)
(F_1)	発語内効力 (Illocution)
(X_1)	命題内容 (Propositional Content)
(e_1)	事態 (State of Affairs)
(f_1)	関係／特性 (Relation or Property)
(x_1)	個体 (Individual)

(4)のような階層モデルの背景にある基本概念は、全ての発話が描写レベル（representational level）と対人レベル（interpersonal level）という2つの意味レベルから構成されるというものである。描写レベルでは、話者が聞き手

に伝えようとする事態が描写される。e、f、xという変項が指し示す意味的実体は、このレベルに属する。一方、対人レベルでは、描写レベルで記述される状況が、聞き手が話者の伝達意図を理解できるような方法で提示される。E、F、Xという変項が指し示す意味的実体は、このレベルに属する。

機能階層と発話構造の関係をもう少し詳しく解説してみよう。述語fの項位置が満たされると、そこに可能事態の集合が描写される。[3] この可能事態の集合に時間的・空間的指定を加えると、叙述層eが形成される。叙述層は、話者が心に描く現実世界あるいは可能世界の状況を指示する。叙述は真理値（truth value）をもつことがあり、このとき命題層Xが形成される。さらに、命題がSやAと伴に発話内述語Fの項になると、命題内容に発語内効力が加わった発語内効力層が形成される。最高層である発話層Eは、発話行為の結果としての文である。すなわち発話層とは、何らかの伝達的状況の下で話者と聞き手の間に交わされる発話そのものを意味する。

それぞれの機能層は、各層に固有の作用要素（operator）や衛星要素（satellite）によって修飾を受ける。Hengeveld (1989: 131, 150-151) による作用要素と衛星要素の定義を以下に示しておく。

(6) 作用要素

a．述語作用要素（Predicate operator）は、裸叙述（Bare Predication）が表す可能事態の集合に付加的な特性を与える文法的手段である。[4]

b．叙述作用要素（Predication operator）は、叙述が表す事態を現実世界または可能世界に位置づける文法的手段である。ゆえに、叙述作用要素は、叙述の潜在的指示対象の集合を、話者が心に描く状況に限定する。

c．命題作用要素（Proposition operator）は、命題内容に対する話者の態度を表す文法的手段である。

d．発語内効力作用要素（Illocution operator）は、話者が自分の伝達的方略に合うように、言語表現のもつ発語内効力を強めたり弱めたりするのに用いる文法的手段である。

(7) 衛星要素

a．述語衛星要素（Predicate satellite）は、裸叙述が表す可能事態の集合に対して付加的な特性を与える語彙的手段である。

b．叙述衛星要素（Predication satellite）は、叙述が表す事態を現実世界または可能世界に位置づける語彙的手段である。ゆえに、叙述作用要

素は、叙述の潜在的指示対象の集合を話者が心に描く状況に限定する。

c．命題衛星要素（Proposition satellite）は、命題内容に対する話者の態度を表す語彙的手段である。

d．発語内効力衛星要素（Illocution satellite）は、話者が自分の伝達的方略に合うように、言語表現のもつ発語内効力を強めたり弱めたりするのに用いる語彙的手段である。

e．発話衛星要素（Clause satellite）は、節の表す発話行為を談話文脈の中に位置づける語彙的手段である。したがって、発話衛星要素は、その節が潜在的にもつ発話媒介行為（perlocution）の集合を限定する。

2.2 修正発話階層構造

この節では、前節で概観した機能文法の基本概念に若干の修正を加ることによって、より洗練された階層構造理論を構築する。とりわけ議論の焦点となるのは、描写レベルが対人レベルへ写像される方法である。

既に述べたように、命題層Xは命題内容を指示対象とする。言うまでもなく命題とは、真理値（真か偽のいずれかの値）をもつ意味論的実体である。実際、このことは断定文について当てはまる。たとえば、(8)の話者は、X_1が指し示す命題内容（she got married to an old man）が真であるという主張をしている。

(8) a. She got married to an old man.

b. (E_1: [(F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (X_1: [she got married to an old man] (X_1))] (E_1))

しかしながら、Hengeveld の発話階層構造理論はもとより機能文法理論そのものも、疑問文や命令文における命題層の位置づけに関して、不明瞭な点を残していると言わざるを得ない。なぜなら、(9)や(10)の話者は、命題内容が真である、若しくは偽であるという態度表明をしているとは考えられないからである。

(9) Did she get married to an old man?

(10) Get married to an old man.

ここで着目したいのは、(8)から(10)において、叙述が指し示す事態に対する話者の心的態度というものが一貫して存在していることである。このことを発話階層構造に反映させるために、命題態度を表す関数 PA を想定する。PA は、描写レベルで記述された事態（すなわち叙述）を、対人レベルにある発語内述語の項位置の一つ（すなわち、X）に写像する。この関係を図式化すると(11)のようになる。これより、(11)を修正発話階層構造と呼ぶことにする。

(11) (E_1 : [(F_1: ILL (F_1)) (S) (A) (PA X_1: [PREDICATION] (X_1))](E_1))

この想定の下での命題はもはや、必ずしも真理値を持つ意味論的実体であるとは限らない。なぜなら、叙述が命題としての資格を得るのは、その叙述が話者の命題態度の対象となったときであり、この時に限るからである。これより、(12)に示した意味的単位を命題層と呼ぶことにする。

(12) (PA X: [...](X))

最後に、暫定的ではあるが、(8)−(10)に対する修正発話階層構造をそれぞれ、(13)−(15)のように考えておく。

(13) a. She got married to an old man.

b. (E_1: [(F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (*I believe* X_1: [she got married to an old man](X_1))] (E_1))

(14) a. Did she get married to an old man?

b. (E_1: [(F_1: Int (F_1)) (I) (You) (*I wonder* X_1: [she got married to an old man] (X_1))](E_1))

(15) a. Get married to an old man.

b. (E_1: [(F_1: Imp (F_1)) (I) (You) (*I want* X_1: [you get married to an old man](X_1))](E_1))

(13)において話者は、命題Xが真であるという心的態度を表明している。つぎに(14)であるが、ここでは、命題Xが真であるかどうか知らないという話者の態度表明がなされている。最後に(15)に関しては、命題Xが実現してほしいという話者の心的態度が表明されている。

3．弱断定述語

3節では、PAが弱断定述語（weak assertive predicate）を含む母型節として書き出されている事例を扱う。[5] さらに、弱断定述語を含む母型節が特定の文脈の下で、発語内効力を緩和する要素（すなわち、発語内効力衛星要素）として機能することを示す。

PAから発語内効力衛星要素への機能推移（functional shift）は、文法化（grammaticalization）や主観化（subjectification）といった現象と密接に関わっている。近年の文献でこういった現象が頻繁に扱われるようになってきているものの、えてして言語現象の記述に収束してしまっているものが多い。機能推移と修正発話階層構造があれば、主観化や文法化といった現象の多くを

包括的に説明することができる。

3.1 弱断定述語を含む命題態度表現

まず初めに、修正発話階層構造に基づいて、母型節が弱断定述語を含む事例を分析してみよう。

(16) 弱断定述語: appear, believe, expect, guess, figure, imagine, seem, suppose, think, *etc.*

弱断定述語の類は、それを含む母型節が挿入句的解釈を受けない場合、《補文の指し示す事態が発生する、または発生したと考える》という意味を含むという点で共通している。

(17) a. believe: to have faith in the truth of the proposition
b. expect: to think or believe that something will happen
c. imagine: to form a picture or idea in the mind
d. figure: imagine, picture mentally
e. reckon: to guess; believe as a result of calculationg roughly but not exactly
f. suppose: take it as a fact that

また、(18)−(24)はこの用法を例示している。[6]

(18) Christie, ***Murder on the Orient Express***, Ⅲ, Ⅸ, 240
I believed all that he told me about his own identity, ...
(彼は身分自身のことを私に打ち明けたのだと額面どおり信じました。)

(19) Fitzgerald, ***The Great Gatsby***, Ⅲ, 59
I had expected that Mr. Gatsby would be a florid and corpulent person in his middle years.
(ギャツビー氏は、中年で血色のよいでっぷり太った男だろうと、かねがね思っていました。)

(20) Christie, ***The Secret Adversary***, Ⅴ, 38
I guessed they weren't hustling any, so I thought I'd come along over, and speed things up.
(それはきっと係の連中の仕事の怠慢からだと思って、自分で行ってみなければしょうがないと思ったのです。)

(21) Christie, ***Murder on the Orient Express***, Ⅰ, Ⅵ, 49
I imagined that he might be ashamed of his beginnings.

(世の中にでる前に、何か人に知られたくないことがあったんじゃないかと想像していました。)

(22) Christie, *The Secret Adversary*, XII, 91

I reckoned it would be no good worrying you with a petty little business like this.

(こんな取るに足らない事件に、あなたのような方を煩わせては悪いと思いました。)

(23) Montgomery, *Anne of Grean Gables*, XXX, 291

But I didn't say anything about it, because I supposed it would be perfectly useless.

(でも私はそのことについて何も言わなかったの。とてもだめだと思ったんですもの。)

(24) Christie, *Murder on the Orient Express*, I, IV, 31

I thought I heard him trying the handle.

(彼が把手を動かす音を聞いたと思ったんです。)

(18)—(24)において、弱断定述語を含む母型節は挿入句的解釈を受けないので、発話の中心的断定部は母型節となる。(25)は、(18)の意味構造を図式化したものである。

(25) (E_1: [F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [I believed all that...] (X_1))] (E_1))

(25)から分かるように、事態描写の部分だけが言語によって表現されており、話者の命題態度や文の発語内効力は意味表示に存在するのみである。また、PA (すなわち、発話時に於ける話者の命題態度) の直接的対象となる事態は、主節 (I believed all) であって、I believed が発話時における話者の命題態度ではない。

弱断定述語のもつ顕著な特徴の1つは、1人称単数現在形で用いられるとき、補文が中心的断定部となることである。[7] このとき、弱断定述語は、補文の指し示す命題が真であるという意味を伝える。

(26) Christie, *Murder on the Orient Express*, II, VI, 110

I believe she married an Englishman some years ago and went to England, but at the moment I cannot recollect the name.

(たしか彼女はずっと前にイギリス人と結婚して、イギリスに渡ったと思いますけど、いまは名前も思い出せません。)

(27) Christie, *The Mysterious Affair at Styles*, IV, 46

Well, I don't know, sir, I expect she would lock it up in that purple case of hers.

(さあ、わかりませんけど、やっぱりあの紫色のケースに入れて鍵をおかけになったのではないでしょうか。)

(28) Christie, ***Murder on the Orient Express***, Ⅱ, Ⅳ, 96
I guess even you get kinda muddled now and then.
(あなたのような方でも、ときには頭が混乱することがあるんですね。)

(29) Christie, ***ibid.***, Ⅲ, Ⅲ, 204
I imagine that two things only would have been different.
(ただ2つのことだけが違っていたと思います。)

(30) Christie, ***The Secret Adversary***, XIX, 160
All the same, I reckon I'll go round there tonight and see if I can't ginger them up to break through their silly rules.
(とにかく、僕は今夜行ってみて、そういう馬鹿げた規則なんか無視するように、医者たちの尻をたたいてやろうと思うんです。)

(31) Christie, ***Murder on the Orient Express***, Ⅲ, Ⅳ, 214
I suppose she couldn't have been more than forty.
(彼女は40歳をこえていたはずはないと思います。)

(32) Christie, ***ibid.***, Ⅰ, Ⅴ, 41
"It is difficult to speak exactly in these matters," said the doctor, "but I think I can say definitely that death occurred between midnight and two in the moming."
(こういうことは、正確に言い当てるのはなかなか困難なことなんですが、死亡時刻が昨夜の12時から翌朝の2時の間であることは、はっきり申し上げることができるのではないでしょうか。)

弱断定述語が1人称単数現在形で用いられていることからもわかるように、(26)ー(32)の下線部は、話者が発話時において補文命題に対してとる心的態度を表している。つまり、問題となっている下線部の表現は、命題態度表現である。別の言い方をすれば、これらの命題態度表現は、修正発話階層構造におけるPAが特定の言語表現の形式で具現化したものである。[8] たとえば、(26)の該当部は、(33)に示した意味表示をもつ。(33)のPAは、命題Xが真であると思うという話者の心的態度を表している。

(33) a. I believe she married an Englishman some years ago and went to England

b. (E_1: [(F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [she married an Englishman some

years ago and went to England] (X_1))] (E_1))

ここで、(34)に示した単純断定文との比較によって、PA の特性を詳しく見ていくことにする。

(34) She locked it up in that purple case of hers.

この発話が含意していることは、そこで描写されている事態の真実性に対して、話者が強い証拠を持っているという事である。言い替えれば、(34)のような単純断定文に関わる PA は、(不履行値によって) 叙述 (描写されている事態) を真実性の度合いの高い命題に写像することを示唆している。そこで、話者の確信を表す命題演算子 CERT を想定し、(34)に対する意味表示を(35)とする。

(35) (E_1: [(F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA CERTX_1: [she locked it up in that purple case of hers] (X_1))] (E_1))

I think や I believe のような命題態度表現が用いられるとき、話者は補文命題の真実性に対して強い証拠を持っていない。これは、弱断定述語を含む命題態度表現が命題の真実性にのみ言及し、その度合いについて言及しない段階まで意味の漂白を受けているからである。この理由によって、PA が言語表現として顕在化すると、断定文の不履行値である命題演算子 CERT が無効になる。

3.2 機能推移

3.2.1 叙述から PA へ

3.2 節では、前節で概観した言語事実に対して本稿が提案する機能推移の概念を適用する。

(36) 機能推移

修正発話階層構造において、ある機能階層に属する要素 α が、その機能階層よりも高次の機能階層に属する要素となるとき、α は機能的に推移するという。

既に述べたように、弱断定述語を含む母型節が《1人称単数代名詞＋弱断定述語》の形式をとるとき、発話時における話者の命題態度を表す。これに対して、母型主語の人称や数が変わったり弱断定述語の時制が変わると、母型節は発話時における話者の心的態度を表すことができず、事態描写 (すなわち、叙述) の一部となる。ここには、事態描写 (の一部) から命題態度表現への機能推移が観察できる。

(37) (E_1 : [(F_1 : ILL (F_1)) (S) (A) (PA X_1 : [ ] (X_1))] (E_1))

弱断定述語が一人称単数現在で用いられるとき、もともと担っていた(16)の意味は、補文の指し示す命題を真とみなすという話者の心的態度のみを表すまでに漂白している。この現象は、語彙的要素がその意味を希薄化させながら文法的要素へと変化するという点で、文法化の一例と見なすことができる。一般的な言い方をすると、描写レベルに属していた要素が対人レベルの要素へと変化するような現象は全て、本稿が呼んでいる機能推移の事例と考えられる。

3.2.2 PA から発語内効力衛星要素へ

前節で《1人称単数代名詞＋弱断定述語》の形式をとる母型節が、発話時における話者の命題態度を表すことをみた。本節ではさらに、この同形式の表現が、話者の命題態度というよりは寧ろ、発語内効力を弱める機能を果たすことをみる。

「オリエント急行の殺人」から引用した、ポワロに向けられたアンドレニ伯爵夫人の台詞から議論を始めてみよう。

(38) Christie, ***Murder on the Orient Express***, Ⅲ, Ⅳ, 209
You are mistaken, Monsieur, that is not my handkerchief.
(お間違えになっていますわ、ムッシュ、それは私のハンカチではありません。)

ここで、伯爵夫人は「お間違えになっています（You are mistaken）」と言って断言している。仮に、伯爵夫人が(39)のように言ったとしよう。

(39) <u>I think</u> you're mistaken, Monsieur, that is not my handkerchief.
(お間違えになっていると思いますわ、ムッシュ、それは私のハンカチではありません。

このとき(39)は、下線部の表現があることによって語気が緩和されている。前節で論じたように、I think のような命題態度表現が用いられた場合、話者は命題の真実性に対して強い証拠を持っていないことが含意される。このことから、(39)が(38)と比べて断定の効力が弱いことを説明することができる。

ところで、(39)の発話が、伯爵夫人からポワロに向けられた敬意的発言だとしたらどうだろうか。この場合の I think は、伯爵夫人の個人的意見を表明する手段でもなければ、命題の真実性に対する心的態度の表明でもない。この場合の I think は、相手に対する強い断言を避けるために用いられている語気弱化表現である。機能文法の用語を用いると、この種の言語表現は発語内効力衛星要素とみなされる。[9] この発語内効力衛星要素を π と表記することにする。

(40) (E_1 : [(πF_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [you are mistaken] (X_1))] (E_1))

このπは前節で議論した特定のPAタイプから発達したものであるので、(40)の意味表示が示すように、単純断定文が含んでいる命題演算子 CERT とは共起しない。PAからπへの推移も、本稿が呼んでいる機能推移の一例と考えることができるので、叙述からPAへの機能推移と併せて、(41)のような図式が成立する。

(41) (E_1 : [(πF_1 : ILL (F_1)) (S) (A) (PA $X_1$1 : [ ] (X_1))] (E_1))

(41)に象徴されるように、修正発話階層構造に基づいて弱断定述語の機能推移を図式化してみると、ある機能階層に属する要素がより高次の機能階層に属する要素へと推移していることが分かる。近年の文献で明らかになっているように、文法化や主観化といった現象もまた、類似した機能推移をたどる。したがって、これまで論じてきた弱断定述語を含む母型節の異なった機能は、言語変化を支配する一般的傾向の反映として捉えることができる。再度強調したいのは、ある言語表現の異なった意味機能を果たす現象が存在するとき、それらの機能的多様性を記述するだけにとどめるのではなく、普遍文法理論に基づいた説明を与えると伴に、相互に結びついた一連の文法的過程の中に位置づけることが重要である。

4．感情述語

4.1 命題態度表現

4節では、議論を感情述語に移し、この種の述語に関しても機能推移がみられることを明らかにする。3節で論じた弱断定述語と同じように、感情述語もまた、《1人称単数代名詞＋感情述語》の形式で話者の命題態度を表すことがある。たとえば、afraid は(42)－(43)が示すように、話者の心配や懸念を表す。

(42) Christie, *The Mysterious Affair at Styles*, Ⅰ, 4
I'm afraid you'll find it very quiet down here, Hastings.
(この屋敷は君には静かすぎるかもしれないよ、ヘイスティングス。)

(43) Woolf, *Night and Day*, Ⅳ, 43
I'm afraid I didn't altogether make my meaning plain.
(どうも自分の意図をはっきりさせられなかったような気がするんだ。)

また、regret や sorry は(44)－(45)が示すように、話者の後悔や残念な気持ちを表すのに用いられる。

(44) I regret that she worries about it. (Quirk *et al.* 1985: 1183)

(45) Christie, ***The Mysterious Affair at Styles***, Ⅲ, 29

"The convulsions were of a peculiar violence, Dr. Wilkins. I am sorry you were not here in time to witness them. They were quite…tetanic in character."

(あの痙攣には特異な激しさがありましたよ、ウィルキンズ先生。お見えになるのが遅れて、あれをご覧にならなかったことを残念に思います。あれは、まさしく……強直性のものでした。)

afraid、regret、sorryのような負の感情を表す述語だけでなく、gladやdelightedなどの正の感情を表す述語も、話者の命題態度を表すのに用いられる。

(46) Montgomery, ***Anne of Avonlea***, XXIX, 313

I am glad Diana is so happy and satisfied.

(ダイアナがとても幸せで満足しているんですもの、よかったわ。)

(47) Doyle, "The Adventure of the Copper Beeches," 289

"I am so delighted that you have come," she said earnestly.

(「ようこそお越し下さいました。」と、彼女はせきこんで話しかけてきた。)

(11)の発話階層構造が示しているように、命題態度関数PAは描写レベルを対人レベルに写像する機能を担っているので、副詞類に代表される衛星要素などとは異なり、意味的に必須の要素である。したがって、(42)ー(47)において下線部の命題態度表現を省略してしまうと、もとの発話とは異なった意味効果をもたらすことになる。すなわち、もとの発話が含んでいた命題態度をそのまま維持することができなくなる。このことは、(42)ー(47)の下線部の表現が話者の命題態度を表していることに他ならない。

4.2 機能推移

つぎに、感情述語が発語内効力を緩和する働きをしている例を見てみよう。(48)は、「申し分のない女中」の中のミス・マープルの台詞である。

(48) Christie, "The Case of the Perfect Maid," 115-116

Well, you know it did strike me that she was a little too good to be true. I practically told Miss Lavinia so. But she simply wouldn't take the hint! I'm afraid, you know, Inspector, that I don't believe in paragons. Most of us have our faults…and domestic service shows them up very quickly!

(あの女が、ああまで理想的な女中と聞いて、そんなことが本当にあるものかと疑いました。それでミス・ラヴィニアにそれとなく言ってみましたが、まったく気づきもしませんでした。ねえ警部さん、理想的な女中なんて、わたしなんだか信用できないんですよね。だれにしたって、欠点があるもので……それが一番早くあらわれるのが家事なんですから。)

(48)で用いられているI am afraidは、補文命題に対する心配や懸念を表しているのではない。その証拠に、補文命題は内容から言っても、ミス・マープルの主義・主張を表している。さらに、(48)においてI am afraidを省略したとしても、もとの発話が含んでいた命題態度はそのまま維持される。[10] これは、問題となっているI am afraidが、《社会文化的文脈によっては自分の主張が受け入れられないかもしれないが(私はこう考える)》という話者の心的態度を含意した表現で、補文命題の断言を緩和する機能を果たしているからである。

つづいて(49)を観察してみよう。(49)は「オリエント急行の殺人」の中のポワロとメアリ・デブナムのやり取りの一節である。

(49) Christie, ***Murder on the Orient Express***, Ⅱ, XI, 139

"A crime…it is all in the day's work to you, eh?"

"It is naturally an unpleasant thing to have happen," said Mary Debenham quietly.

"You are very Anglo-Saxon, Mademoiselle. Vous n'eprouvez pas d'emotion."

She smiled a little. "<u>I am afraid</u> I cannot have hysterics to prove my sensibility. After all, people die every day."

(「殺人……それがあなたには日常茶飯事の出来事なのですか、え?」

「当然不愉快なことですわ。」と、メアリ・デブナムは静かに言った。

「あなたは典型的なアングロ・サクソン民族ですな、マドモアゼル。感情を外にお出しにならない。」

彼女は少し微笑んだ。「残念ながら、自分の感受性が強いことを証明するために、わたくしヒステリーをおこすことなんてできませんわ。所詮人間は毎日死んでいるんですから。」)

メアリ・デブナムはポワロの期待に反して非協力的であり、感情を表に出さない極めて冷めた受け答えをする。たとえば(49)にあるように、ポワロが「あなたは典型的なアングロ・サクソン民族ですな、マドモアゼル。感情を外にお出しにならない。」と皮肉めいた発言をすると、「残念ながら、自分の感受性が強

いことを証明するために、わたくしヒステリーをおこすことなんてできませんわ。」と返している。この台詞の中にI am afraidという表現が用いられているが、このI am afraidは、補文命題に対する話者の懸念や心配を表しているのではなく、補文の語気を緩和する働きをしている。もしメアリ・デブナムが(50)のように発言していたら、それは拒絶を意味する強い主張をしたことになる。

(50) I cannot have hysterics to prove my sensibility.

感情を表に出さず冷静さを保っている彼女としては、ポワロに対して冷静沈着な態度で臨まなくてはならない。その一環として、彼女は、相手の期待や要望に応えられないことを柔らかく伝えるために、I am afraidという表現を用いているのである。この用法は、実際のメアリ・デブナムの気持ちはどうであれ言語表現の面から見れば、断言を避けるという点で敬意表現の1種とみなすことができる。

以上、I am afraidという表現に関する2種類の意味機能を振り返ると、(51)から(52)へ向かう機能推移の図式が成立することがわかる。

(51) a. I'm afraid you'll find it very quiet down here.

b. I am afraid (=PA)

(E_1: [(F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [you'll find it very quiet down here] (X_1))] (E_1))

(52) a. I'm afraid, you know, Inspector, that I don't believe in paragons.

b. I am afraid (=illocution satellite)

(E_1: [(π F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [I don't believe in paragons] (X_1))] (E_1))

ここでもまた、I am afraidという表現が命題態度表現から発語内効力衛星要素へと推移していることがわかる。この推移の過程は、発話を構成する機能階層を想定する機能文法理論の下で、ある機能階層に属する要素から高次の機能階層に属する要素への変化として説明される。

regretやsorryについても同様に、機能推移の事例が観察される。たとえば、(53)や(54)で用いられているI regretやI am very sorryは、補文命題に対する情緒的反応を表しているのではなく寧ろ、中心的断定部である補文の語気を弱化する働きをしている。

(53) Christie, ***Murder on the Orient Express***, I, III, 28

"I regret, Monsieur," he said at length, "that I cannot oblige you."

(「残念ながら」と、彼はやっと言った。「ご期待にはそえません。」)

(54) Montgomery, *Anne of Green Gables*, XIX, 191
(". . . Sit down here and tell me about yourself.")
"I am very sorry I can't," said Anne firmly.
(「せっかくですが、そうしていられないんです。」と、アンはきっぱり言った。)

ここでもやはり、問題となっている言語表現を省略してみると、そのことがはっきりする。つまり、問題となっている言語表現を省略した後の発話が、もとの発話と同じ命題態度を伝えるからである。

さらに、regret や sorry は、(55)－(58)が示すように、後に続く発話（の内容）に対する話者の情緒的発話態度を表明する手段としても用いられることがある。

(55) Woolf, *The Voyage Out*, IV, 47
I regret to say that I sat upon it.
(残念なことだが、私はそのヤマネの上に座って押し潰してしまったんです。)

(56) Christie, *Murder on the Orient Express*, III, VI, 221
"I am sorry, M. Poirot, but I must refuse to answer that question."
(「申し訳ないが、ポワロさん、その質問に答えるわけには参りません。」)

(57) Sheldon, *The Best Laid Plan*, III, 49
I'm sorry to bother you, Senator Davis, but I wonder if I could see you?
(ディヴィス上院議員、お邪魔をして申し訳ないのですが、お目にかかれないでしょうか。)

(58) Christie, "Four and Twenty Blackbirds," 183
I am sorry to tell you that I have had no success as regards Uncle Anthony.
(アントニー伯父様につきご依頼の件、ご期待に副えなかったことをご報告します。)

この用法は、機能文法で言う発話衛星要素である。発話衛星要素もまた、文意味に対して随意的限定要素である。したがって、発語内効力衛星要素同様、それが省略されたとしても、もとの発話の命題態度はそのまま維持される。

以上のことから、sorry や regret についても、(59)から(61)に象徴される機能推移が生じていることがわかる。

(59) a. I am sorry you were not here in time to witness them.

b. I am sorry (=PA)

(E_1: [(F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [you were not here in time to witness them] (X_1))] (E_1))

(60) a. I am very sorry I can't (sit down there and tell you about me).

b. I am very sorry (=illocution satellite)

(E_1: [(π F_1: Decl (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [I can't] (X_1))] (E_1))

(61) a. I'm sorry to bother you, but I wonder if I could see you?

b. I am sorry to bother you (=clause satellite)

(π E_1: [(F_1: Int (F_1)) (I) (You) (PA X_1: [I could see you](X_1))] (E_1))

(62)のように、感情述語が事態そのものの記述に用いられることを考慮に入れると、感情述語を含む表現の中には、叙述からPAへ、PAから発語内効力衛星要素へ、そして発語内効力衛星要素から発話衛星要素へと、下位の機能階層に属する要素がより上位の機能階層に属する要素へと推移するものが存在することがわかる。

(62) Christie, The Secret Adversary, XVII, 139

Tommy deeply regretted that it was he who had entered first.

(トミーは最初に入ったのが自分だったことをひどく後悔した。)

こういった機能推移現象は、発話を構成する機能階層を想定する文法理論の中でこそ、適切に捉えることができるのである。

最後に正の感情を表す述語について少し述べておく。このタイプの述語には、負の感情を表す述語と比較して顕著な違いがある。それは、正の感情を表すが故に、発語内効力を限定する機能が無いことである。しかしながら、(63)のように、発話態度を合図する用法は存在する。

(63) I am pleased to announce that Mr. Johnson has just been appointed as Editor of the Journal. (大杉 1989[6]: 94)

(ただいまジョンソン氏が本誌の編集長として選出されましたことを発表させていただきます。)

正の感情を表す述語に関しても、命題態度表現から発話衛星要素へと機能推移が生じていることは確かである。

5　結語

本稿では、形式上同型の母型節が意味上異なった機能を果たす現象を扱った。そして、この同型の母型節が果たす幾つかの用法をただ単に記述するだけでなく、本稿が提案する機能推移の概念に基づいて、一連の文法的過程の中に位置づけた。たとえば、I am sorry という言語表現を取りあげてみると、(64)−(66)に示した３つの異なった意味機能を担っていることが観察された。

(64)　Propositional Attitude

　　I am sorry you were not here in time to witness them.

(65)　Illocution Satellite

　　I am very sorry I can't (sit down there and tell you about me).

(66)　Clause Satellite

　　I'm sorry (to bother you), but I wonder if I could see you?

(64)では、I am sorry が過去に生じた事態に対する話者の命題態度を表しているのに対して、(65)では、話者の命題態度というよりは寧ろ、中心的断定部の語気を弱める働きをしている。最後に(66)の I am sorry の用法は、接続詞 but に続く内容に対する前置きとなっており、この中心的断定部に対する話者の発話態度を表している。これらの異なった意味機能は、機能文法の基本的枠組みの下で、機能推移という文法的プロセスとして説明された。すなわち、I am sorry という言語表現が、命題態度を合図する要素から発語内効力を緩和する要素へと、そして更に発話そのものを限定する要素へと推移している。

注

1　解説の都合上、これ以降、議論の対象となっている例文中の表現に下線を施すことにする。

2　(4)においてＳ、Ａ、ILL はそれぞれ、話者（Speaker）、聞き手（Addressee）、発語内効力（Illocution）を表している。また、変項 ILL に対する具体的値としては、断定（Decl(arative)）、命令（Imp(erative)）、疑問（Int(errogative)）等が想定されている。

3　機能文法で用いる項（term）は概ね、他の文法理論で用いられている項（argument）に相当する。但し、前者の場合、Ｅ、Ｆ、Ｘ、ｅといった変項も述語の一種と考えられており、固有の項位置をもつ。

4　裸叙述とは、述語と項の組み合わせから形成される可能事態の集合である。ここでは、事態の発生や頻度に関わる指定がなされることはない。

5 弱断定述語に関しては、Hooper and Thompson 1973、Hooper 1975 を参照。

6 母型節の挿入句的解釈を避けるために、述語の時制は過去形のものを採用している。

7 (i) の下線部には一人称単数代名詞が含まれないが、話者の命題態度を表す表現とみなすことができる。

(i) Christie, ***Murder on the Orient Express***, II, XV, 175

No, I am not imagining things at all. But <u>it seems to me</u> that a lot of time is wasted by not speaking the truth—by beating about the bush instead of coming straight out with things.

(いえ、想像じゃございませんわ。真相を口にしないためにずいぶん時間を浪費しているような気がいたしますわ……率直に話し合えばいいものを、遠回しに探りを入れてばかりいるから。)

8 詳しい議論に関しては Ohmura 2000 を参照。

9 機能文法の文献では、衛星要素はふつう副詞類である。弱断定述語を含む I believe, I suppose, I think 等の表現が機能文法理論において、衛星要素のメンバーとして見なされるのが妥当であるのか否かは明らかではない。しかしながら、問題としている述語が、挿入句的解釈で用いられたときと、補文が表す命題内容の真実性に言質を与える意味で用いられたときでは、その意味機能が異なっていることは自明である。

10 発語内効力を限定する I am afraid は省略可能であると同時に、(i) – (iii) が示すように、中心的断定部の後に付加的に付け加えることができる。

(i) Woolf, ***Night and Day***, II, 24

And I'm not much good to you, <u>I'm afraid</u>."

(それに、僕は姉さんにとってあまり役に立っていない、そう思うんだ。)

(ii) Woolf, ***ibid.***, IV, 47

It's not such an imposing name as Katharine Hilbery, <u>I'm afraid</u>.

(キャサリン・ヒルベリーという名前ほど印象的ではないと思うけど。)

(iii) Woolf, ***ibid.***, XXII, 238-239

It'll mean, too, <u>I'm afraid</u>, that I shan't be as free for a considerable time as I have been.

(それにそのため、僕はしばらくの間、今までのように暇があるって訳にはいかないだろうと思うんだ。)

これらの事例において I'm afraid は、先行発話に含まれる命題態度を無効にし、新しい命題態度としてそれに取って代わっているのではない。文意味の随意的要素として先行発話の発語内効力を限定しているのである。

引用文献

小説

Christie, Agatha. 1920. *The mysterious affair at styles.* Rpt 1991. New York: The Berkley Publishing Company.

Christie, Agatha. 1922. *The secret adversary.* Rpt 1991. New York: The Berkley Publishing Company.

Christie, Agatha. 1925. *The case of the perfect maid.* In *Three blind mice and other stories,* Rpt 1984. New York: Berkley Books.

Christie, Agatha. 1934. *Murder on the orient express.* Rpt 1991. New York: Harper Collins Publishers.

Doyle, Sir Arthur Conan. 1892. The adventure of the copper beeches. In *The adventure of sherlock holmes.* 277-304. Berkley Prime Crime Edition, 1994. New York: Berkley Publishing Group.

Fitzgerald, Scotto. 1925. *The great Gatsby.* Rpt 1996. Tokyo: Hon-no-tomosha.

Montgomery, Lucy Maud. 1925. *Anne of green gables.* Rpt 1994. New York: Puffin Books.

Montgomery, Lucy Maud. 1925. *Anne of avonlea.* Rpt 1994. New York: Puffin Books.

Sheldon, Sidney. 1997. *The best laid plan.* Glasgow: HarperCollinsPublishers.

Woolf, Virginia. 1915. *The voyage out.* Rpt 1992. New York: Penguin Books.

Woolf, Virginia. 1919. *Night and day.* Rpt 1950. London: The Hogarth Press.

学術書・論文

Dik, Simon. 1997. *The theory of functional grammar: Complex and derived constructions,* Berlin: Mouton de Gruyter.

Hengeveld, Kees. 1989. Layers and operators in functional grammar. *Journal of Linguistics* 25, 127-157.

Hengeveld, Kees. 1990. The hierarchical structure of utterances. In *Layers and levels of representation in language theory: A functional view,* ed. Jan Nuyts, Machtelt Bolkestein and Co Vet, 1-23. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Hengeveld, Kees. 1996. The internal structure of adverbial clauses. In *Complex structures: A functionalist perspective,* ed. Betty Devriendt, Louis Goossens and Johan van der Auwera, 119-147. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Hooper, Joan B. 1975. On assertive predicates. In *Syntax and Semantics*4, ed. J. P. Kimball,

91-124. New York: Academic Press.

Hooper, Joan B. and Sandra A. Thompson. 1973. On the applicability of root transformations. ***Linguistic Inquiry*** 4: 465-497.

大杉邦三.1982, 1989[6].英語の敬意表現.東京：大修館書店.

Ohmura, Mitsuhiro. 2000. On the assertive predicates: A functional grammar account.中野弘三博士退官記念論文集.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. ***A comprehensive grammar of the english language***, London and New York: Longman.